

# 西双版纳 放浪の旅

■その3



【右】タクシー運転手の張(チャン)さんは150元で一帯の棚田を半日掛けて案内してくれた。【上】朝の市場で陽気に話しかけてきた楊(ヤン)さん(左)と友人。3人もここで生まれ育ったイ族の人たちだ。



高速バスで約3時間

22日、南国の陽気を行くんだ。「元陽なら3日間満喫して、景洪から元陽を目指す。途中、墨江(モージャン)にも棚田があるとバツドさんが聞いたと言った。墨江は哀牢山(アライオサン)の東の外れに位置する古い街で、プーアル茶の産地でもある。これと言った観光資源はなく、「北回帰線の街」を売り物にしている。結局、棚田は見つからなかった。

24日、元江(イエンシャン)、石屏(シーピン)、建水(ジャンスエイ)を経て、最終目的地の元陽(イエニャン)を目指すことにした。バスターミナルで、「どこ

元陽は別名「新街鎮」と言う。標高1800mの斜面をジグザグに上る坂道の両側に建物が並び、山岳地特有の街並みである。道は本じかないので、バスターミナルの周辺は常に渋滞している。霧の晴れることを期待して、タクシーを捕まえ棚田を目指した。天はわれわれに味方

「元陽なら3日間満喫して、景洪から元陽を目指す。途中、墨江(モージャン)にも棚田があるとバツドさんが聞いたと言った。墨江は哀牢山(アライオサン)の東の外れに位置する古い街で、プーアル茶の産地でもある。これと言った観光資源はなく、「北回帰線の街」を売り物にしている。結局、棚田は見つからなかった。



朝の市場はどこでも大賑わいだ。霧雨が煙る1本道の両サイドに小吃店と野菜や果物を売る店がずらりと並び、元気な叫び声が飛び交っていた。



「あなたたちは幸運だ」と運転手の張さんが言った。われわれが元陽に着いた日、数日続いていた霧が消え、晴れた。

